

Title	『穆天子伝』版本についての一考察：和刻本及び何允中編漢魏叢書本を中心に
Sub Title	A bibliographical study of Mutianzi Zhuan focused on editions published in Japan with those stored in Han Wei Congshu edited by He Yun Zhong
Author	島田, 翔太(Shimada, Shota)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2011
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.46 (2011.) ,p.473- 499
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0473

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『穆天子伝』 版本についての一考察

— 和刻本及び何允中編漢魏叢書本を中心に —

島 田 翔 太

一 はじめに

『穆天子伝』は西晋時代、当時の汲冢汲冢（現河南省衛輝市）の墓葬から出土した「汲冢竹書」と呼ばれる竹簡文書の一つで、周の穆王の西方巡遊、昆侖踏破、西王母との会見などを描いた文献である。

その出土時期については、『晋書』にいくつかの異なる記述が存在するが^①、概ね西暦二八〇年前後、晋が呉を平定した頃のことである。出土した竹書のうち、『紀年』と呼ばれる文献（いわゆる『古本竹書紀年』）が、夏の禹王から戦国魏王までの年代を

記しているため、墓葬は戦国時代のものであり、汲冢は戦国時代、魏に属していたことから、当初は魏王墓とも考えられた^②。

『晋書』卷五一束皙伝に「初發冢者燒策照取寶物、及官收之、多燼簡斷札、文既殘缺、不復詮次。武帝以其書付秘書校綴次第、尋考指歸而以今文寫之」とあるように、竹書は武帝（司馬炎）の命令で、秘書省や中書省などの文書を管理する役所のもと、整理、保存されることになった。『晋書』卷三九荀勗伝に「及得汲冢中古文竹書、詔勗撰次之、以爲中經、列在祕書」とあるように、竹書の整理を担当したのは、中書監荀勗である。

『穆天子伝』荀勗序には、「古文穆天子傳者、太康二年汲縣民不準盜發古冢所得書也。皆竹簡素絲編。以臣勗前所考定古尺度

其簡長二尺四寸、以墨書一簡四十字。…(中略)…：汲冢收書不謹、多毀落殘缺。…(中略)…：謹以二尺黃紙寫上。請事平以本簡書及所新寫並付祕書繕寫、藏之中經、副在三閣」とある。

戦国時代の一尺は約二三・一cmとされ、簡長「二尺四寸」は約五五・四cmである。近年出土が続いている戦国時代の竹簡の長さと比較すると、この簡長は長い部類に入る。晋代には一尺が約二四・四cmほどになっていたが、『晋書』卷一六律曆志上審度によると、この「今尺」を基準に作られた楽器の音階が合わないことに疑問を持った荀勗が復元したのが「古尺」で、これに基づいて作った楽器は汲冢竹書と同時に出土した楽器とも音階が一致したという。こうして、古文、即ち秦の文字統一以前の字体(ただし、「小篆」とする説もある)で書かれていたこの文献は、今文、すなわち隸書で書き写され、その後、副本が作られたと考えられる。

それからやや遅れて、『穆天子伝』に注を附したのが東晋の郭璞である。現存する『穆天子伝』伝本の多くは、この郭璞注をとともなう。『春秋左伝正義』卷六〇杜預後序の孔穎達疏^⑤に、王隱『晋書』束皙伝を引いて、「周王遊行五卷、説周穆王遊行天下之事、今謂之穆天子傳」とあって、もともとの書名は「周

王遊行」、卷数は「五卷」とされていたようであるが、郭璞注をとともなう現行の『穆天子伝』は基本的に六卷構成である。清代、嘉慶年間に、『穆天子伝』に校訂をほどこした洪頤煊が「此書本五卷、末卷乃雜書十九篇之一」(校正穆天子傳序)と言うように、卷六は現行『晋書』束皙伝に汲冢竹書「雜書十九篇」のうちの一つとして見える『周穆王美人盛姬死事』を取り込んだもので、遅くとも郭璞が注をつけた段階では、六卷構成となっていたと思われる。

続く南北朝期における伝世過程は明らかではないが、以下のごとく『隋書』以降の歴史書には著録がある^⑥。

『隋書』卷三三 經籍志 史部 起居注類

穆天子傳六卷。汲冢書。郭璞注。

『旧唐書』卷四六 經籍志 史部 起居注類

穆天子傳六卷。郭璞撰。

『新唐書』卷五八 藝文志 史部 起居注類

郭璞穆天子傳六卷。

『宋史』卷二〇三 藝文志 史部 別史類

郭璞注穆天子傳六卷。

また、唐代の『北堂書鈔』や『芸文類聚』、宋代の『太平御覽』に引用されることから、一定の流布は確実視できる。

『穆天子伝』が宋代に刊行されたのかどうかは不明であり、元代の版本も現存しない。しかし、『穆天子伝』に附された旧序の一つである元の王漸による序には「南臺都事海岱劉貞庭幹舊藏是書。懼其無傳、暇日稍加讎校譌舛、命金陵學官重刊」とあり、この序文は元の至正十年（一三五〇）のもので、このときの刊行を「重刊」としていることから、それ以前にも版本が存在した可能性がある。

明の正統十年（一四四五）刊とされる道藏所収のものが、現存する最古の『穆天子伝』版本で、それに続くものとして、嘉靖年間ごろの天一閣本がある。やや間を置いて萬曆以降の版本となると、諸種現存している。^⑧

『穆天子伝』という書の位置づけは、『隋書』経籍志に「體制與今起居正同、蓋周時内史所記王命之副也」として起居注類に置かれ、『宋史』芸文志では別史へと移された。その後、清代、四庫全書において史部への分類そのものが見直され、子部小説家類に置かれることとなった。こうした変遷を見るに、時代が

降るにつれ、本書の内容の「事実」としての信頼性は減じたようであるが、文淵閣四庫全書の『穆天子伝』提要には「固考古者所宜寶重矣」とあって、なお一定の価値を認めている。^⑨

本書の内容は、さすがに穆王の在位した西周時代の「事実」をそのまま描いたものとは考えにくい。しかし、西周時代に仮託された、戦国時代の人々の一つの觀念の反映であるには違いない。そして、戦国時代を中心とする古代の文献の出土が相繼いでいるここ数十年來の状況は、ごく早期の出土文献として、本書があらためて評価、検討される契機となりうる。こうした現状において、いかなる伝本が現存するのかを把握しておくとは必要な作業である。

中国では『穆天子伝』の伝本について抄本、版本ともに網羅的に言及したものとして、古くは顧実^⑩、比較的近年では、王貽樑^⑪、鄭傑文^⑫などによる研究がある。しかし、やむを得ないことではあるが、これらの研究では和刻本については何ら触れるところがない。本稿では、筆者のこれまでの調査結果に基づき、和刻本、及びその底本である明何允中編漢魏叢書本ほか、いくつかの版本について検討することで、『穆天子伝』伝本研究の不備を補いたい。

二. 和刻本『穆天子伝』

日本において刊行された『穆天子伝』は、版種としては一種のみ存在する。はじめに共通の書誌事項を、次いで既見伝本について、各本ごとの特徴を示す。

A. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 明汪明際校

延享四年（一七四七）刊（京、博文堂丸屋田中市兵衛）

覆明〔天啓・崇禎〕刊何允中編漢魏叢書本

本文の前に元の王漸序あり。初行「穆天子傳序」と題し、末題に「時至正十年歲在庚寅春二月二十七日壬子北岳王漸玄翰序」、六行十四字、三張。本文卷頭は初行「穆天子傳卷一」として、第二行低五格「晉 郭璞註 吳郡汪明際訂」、第三行低三格「古文」、第四行より本文。卷二以降は注者名、校者名を出さず、第三行低二格「古文」とし、第三行より本文。左右双辺（二〇・四×一二・九cm）、有界、每半葉九行二十字。注小字双行。句読

点あり。版心は白口単黒魚尾。上象鼻「穆天子傳」、中縫に卷数、張付（張付は六卷通し、計三十張）。頭注があり、行四字有郭。これは汪明際による校語と思われる。尾題は「穆天子傳卷一終」のごとく、卷六まで同様。

後述するように、この和刻本は漢武帝内傳、飛燕外傳との合刻本としての出版が本来の形態と思われる。そこで、これらの二書と合わせて架蔵されているものをはじめに紹介する。印記、書入等については調査時期により粗密があるため、完全なものではないことをお断りしておく。現所蔵機関の印記は省略し、□□は判読できていない文字を示す。

① 関西大学総合図書館蔵 和大二冊の内（L二三―B一四 五二・一四五三）

淡茶色表紙（二七・五×一八・二cm）。第一冊の左肩に双郭刷題簽「穆天子傳」とあり、穆天子傳を収め、第二冊の左肩に双郭刷題簽「漢武内傳／飛燕外傳」とあり、漢武帝内傳一卷（漢班固撰 明章斐然校）、飛燕外傳一卷（漢伶玄撰 明陳斗垣校）を収める。次に芥煥彦章（芥川丹邱）跋を附す。每半葉七行、

字数不定、写刻、二張。跋題なしで初行より跋文、末題に「延享丁卯夏五月／平安芥煥彦章題」とし、「芥煥／之印（陰刻）」、「彦／章」の印記を模刻。飛燕外傳末葉に刊記「延享四年丁卯五月吉旦／二條通柳馬場西^江入町丸屋／皇都書林 田中市兵衛」とある。芥川跋の後に「博文堂藏板目録」一張を附し、右半葉下段に「穆天子傳 晉郭璞注 全二冊／漢武内傳 漢班固著 合刻／飛燕外傳 漢伶玄著 同上」とある。

②名古屋大学中央図書館蔵 和六一冊の内（九三—Ka—森本）
淡茶色表紙（二七・三×一八・〇cm）。左肩に双郭刷題簽「穆天子傳」、題簽下部に「漢武内傳／飛燕外傳」と墨書。飛燕外傳末葉刊記、芥川跋、藏板目録、①に同じ。朱墨批点。印記「森本氏印」、「石雲」。森本喬松・滋抄旧蔵。

③一橋大学附属図書館蔵 和六一冊の内（Mura-Yee-11）
淡茶色表紙（二六・六×一七・七cm）。左肩に双郭刷題簽残片「武内傳／燕外傳」。右肩「完全」と墨書。飛燕外傳末葉刊記、芥川跋は①②に同じ。藏版目録は同版だが、①②が左半葉下段「金匱玉函經」の撰者名を「漢仲景述」に作るのに対し、この本は「晋王叔和撰」に改修。印記「北村文庫」、「植藏／書」。三浦新七旧蔵。

①②の二本が早印、藏板目録に改修のある③はやや後印と思われる。博文堂藏版目録の表記や、芥川跋の「書林田氏新刻三書、索余題言」という記述から、漢武帝内傳、飛燕外傳との合刻本としての刊行が、本来の形態と見てよい。

続いて、合刻された漢武帝内傳に改修のある次の本を挙げておく。

A. 又

後印（大阪、文會堂京屋山本淺治郎）

漢武帝内傳は明和三年（一七六六）修（江戸、伏見善六等）

④無窮会蔵 和六一冊の内（織田文庫 オー三五〇一・三四三三）
水色表紙（二五・五×一八・一cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。見返しに「穆天子傳 晉郭璞注／漢武内傳 漢班固著／飛燕外傳 漢伶玄著／大阪書肆 文會堂梓」。第二冊左肩に双郭刷題簽「漢武内傳／飛燕外傳」。漢武帝内傳本文の前に「漢武帝内傳序」として宝暦十年の太神貴道による序を附す。¹⁵漢武帝内傳本文巻頭第二三行は、①②③が低五格「漢 扶風班固著

章斐然閣」に作るのに対し、この本は低五格「漢班固著 日本太神貫道訂」と改修。飛燕外傳末葉の刊記、芥川跋は①②③に同じ。芥川跋の後に、「大阪書舗山本文會堂京屋淺治郎藏版目録」を附し、「穆天子傳」、「漢武内傳」、「趙飛燕傳」につき、

「三傳全二冊」とする。後見返しに刊記「明和三年孟秋」とあり、前から「京都書林」として「堀川高辻上ル町／植村藤右衛門」「寺町四条下ル町／植村藤治郎」、「大坂書林」として「高麗橋一町目／淺野彌兵衛」「日本橋通二町目／戸倉屋喜兵衛」、「江戸書林」として「本石町十軒店／伏見屋善六」。印記「筒井藏書」。織田小覺旧藏。

④の二冊は別個に架蔵されているが、文會堂による刊記が共通することから本来一俱であったと推定される。漢武帝内傳における宝曆十年（一七六〇）の太神序の追加、および本文巻頭第二行の改修は、江戸の伏見屋善六等によって、明和三年（一七六六）の段階で行われたもので、この本そのものは、その修版を用いた、大阪の文會堂京屋山本淺治郎による後印と推定される。修版による初印本は未見である。

続いて、穆天子傳単独で架蔵されているものを挙げる。これらについては、早印、後印の判別はしがたく、ひとまず、所蔵機関の五十音順に並べた。

⑤九州大学中央図書館藏 和大一冊（五六六―ホ一）
淡茶色表紙（二六・九×一七・八cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。

⑥慶應義塾大学斯道文庫藏 和大一冊（大曾根文庫一普八）
淡茶色表紙（二七・二×一八・一cm）。左肩双郭刷題簽殘片「子傳」。印記「猪狩／氏章」、「高田氏／藏書記」、「樂木／莊藏」。大曾根章介旧藏。

⑦慶應義塾図書館藏（三田旧館）和大一冊（六六六―六七―一）
標色艶出表紙（二五・五×一七・五cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。印記「故新井由三郎遺／書寄贈之章」、「加藤／藏書」、「鶴牧文庫」、「藤敏」。新井由三郎旧藏。

⑧慶應義塾図書館藏（三田旧館）和大一冊（中文奥野一―六A―一）
淡茶色表紙（二七・〇×一八・〇cm）。左肩書題簽「穆天子傳」。右肩「朝川善庵手澤本」押紙。印記「樂我小／室珍藏」、「善庵

三十／年精力／所聚」、「善／庵」。朱墨批点。奥野信太郎旧蔵。

⑨国立公文書館内閣文庫蔵 和大一冊〈三〇九一七〇〉

淡茶色表紙（二六・七×一七・七cm）。左肩「穆天子傳」之六全」と題書。一部に書入あり。印記「昌平坂／學問書」、「桂氏図書記」、「浅草文庫」、「文政癸未」。昌平坂学問所旧蔵。

⑩中央大学多摩図書館蔵 和大一冊〈九二三一Ka一二八〉

淡茶色表紙（二五・八×一七・五cm）左肩双郭刷題簽残片「子傳」（上部に「穆太^{マツ}」と補写）。印記「倉姓藏書」、「倉氏□藏書記」「柳乃内文庫印」。

⑪筑波大学中央図書館蔵 和大一冊（ル一三八〇一三〇）

栗皮色横縞空押表紙（二六・七×一七・六cm）。左肩「穆天子傳 全」と題書。一部批点あり。印記「宇氏／公□」。

⑫東北大学図書館蔵（本館） 和大一冊〈狩一四一五六一四〉

淡茶色表紙（二六・五×一八・二cm）。左肩双郭刷題簽に「穆天子傳」と題書。印記「□□／書房」。副葉に荀勗序を補写、本文に後述の明鍾惺校本との対校と思われる書入あり。狩野亨吉旧蔵。

⑬東京大学総合図書館蔵 和大一冊〈鷗E一四六一一四二〉

茶色表紙（二六・八×一七・七cm）。左肩刷梓題簽「穆天子傳

單」と墨書。印記「笠間文庫」、「大上」、「鷗外／藏書」。森鷗外旧蔵。

⑭東京大学総合図書館蔵 和大一冊〈渡G一三〇一二六九〉

淡茶色表紙（二五・七×一八・三cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。芥川跋あり。印記「渡／部／文／庫」（舟型）。渡部信旧蔵。

⑮新潟県立図書館蔵 和大一冊〈史一IV一二〇〇四二一（一）〉

黄色巾繫空押表紙（二五・八×一七・二cm）。左肩双郭刷題簽に「穆天子傳 完」と題書。芥川跋あり。印記「明治三十九年十二月廿八日／新潟市／佐藤莊松氏寄贈」、「大正四年八月十三日／新潟市寄贈」、「新潟市／圖書館／藏書印」、「□島／藏書」。佐藤莊松旧蔵。

⑯新潟大学附属中央図書館蔵 和大一冊〈史一IV一〇一七〉

淡茶色表紙（二五・八×一八・四cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。芥川跋あり。

⑰佛敎大学図書館蔵 和大一冊〈史一古一六〇〉

淡茶色表紙（二六・〇×一八・五cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。芥川跋あり。印記「飛驒／桐山／文庫」、「徇徂園／圖書記」。

⑱宮城県図書館蔵 和大一冊（二〇〇九三―青―九二三―一八）

淡茶色表紙（二六、九×一七、九cm）。左肩双郭刷題簽「穆天子傳」。右下「五十一」と墨書。印記「横澤淨／寄附／仙臺文庫」、「仙臺文庫」、「青柳館／文庫」、「石經／□藏」、「□翠／閃房」、「源印／義卿」、「市丹臣文／藏獻／仙臺府□」。青柳文庫旧蔵。

これらがもとと穆天子傳のみで単行されたのか、購書、架蔵の段階でたまたま単独になったのかは明らかにはしたが、⑭⑮⑯⑰のごとく芥川跋をとまなうものは、単行された可能性が高い。

このほか、同版と推定される未見本としては、佐野市立郷土博物館蔵本（須永文庫子一―一五―一・二）などがある。

巻一卷頭に「汪明際訂」と題し、頭注を持つのが、この和刻本の特徴であるが、次にその底本について、見ていきたい。

三、何允中編漢魏叢書本とその覆刻本

和刻本の底本は次の本である。

B. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 明汪明際校

明（天啓・崇禎）刊

明何允中編漢魏叢書所取

本文の前に元王漸序あり。初行「穆天子傳序」と題し、第二行より序文、末題に「時至正十年歲在庚寅春二月二十七日壬子北岳王漸玄翰序」、六行十四字、三張。本文卷頭は初行「穆天子傳卷一」と題し、第二行低五格「晉 郭璞註 吳郡汪明際訂」、第三行低二格「古文」、第四行より本文。卷二以降は注者名、校者名を出さず、第二行低二格「古文」とし、第三行より本文。注小字双行。傍点、圈点附刻。左右双辺（二九、四×一三、四cm）、有界、每半葉九行二十字。版心は白口単白魚尾。上象鼻「穆天子傳」、中縫に卷数、張付（張付は卷）にと更する、計三十張。頭注行四字無郭。尾題は「穆天子傳卷一終」のごとく、卷六まで同様。叢書初冊に萬曆二十年（一五九二）明屠隆序があり、初行「漢魏叢書序」と題し、末題は「萬曆壬辰蜡月東海屠隆緯眞甫纂」。六行十四字、五張。「漢魏叢書總目」として、經翼十

七種、別史十四種、子餘十八種、載籍二十七種、計七十六種。總目にそのまま続けて何允中による叢書版行についての序があり、全行低三格で、末尾に印記「何印／允中」、「文／開」を模刻。

校者汪明際については、『康熙嘉定県志』卷一一選舉に萬曆四十六年（一六一八）進士としてその名が見え、卷一六人物二に伝がある¹⁸⁾。

汪明際字無際。少孤、力學、旁通詩畫。事母以孝聞、撫弟妹、極友愛。年弱冠、李長蘅一見其文、曰、此國士也。自是聲名籍甚：（中略）：

萬曆戊午（四十六年）、舉于鄉。屢困、公車謁選、得壽昌諭、讀書魏萬山房。倡導古學、僻邑風、尚丕變。由太學錄、歷大理都察院司務、陞工部主事、晉員外郎：（中略）：

後、以同官接管悞工諉卸、被逮捫杖以沒。非其罪也。所著有邀仙閣集、所裁定有理會通¹⁹⁾、廣輿記、通鑑箋註、韓非子、淮南子諸書、行世。

その死没については、『明季北略』卷十三「聖駕巡城」の条に、

「繫計臣二人于獄、後杖斃其一、汪明際是也」とあり、これは「崇禎丁丑（十年＝一六三七）」のことで、その活動時期は萬曆～崇禎年間と考えられる。

叢書の編者である何允中については多洛肯『明代浙江進士研究』²⁰⁾によれば、天啓二年（一六二二）進士、浙江仁和県の人、字は文開、庚寅（萬曆十八年（一五九〇））の生まれである。これらのことから、刊行時期は天啓・崇禎年間と推定される。總目に附された何允中の序には次のようにある。

叢書彙自括蒼何先生鐘。版行則新安程氏：（中略）：何氏舊目百種、程氏僅梓三十七。茲其搜益其半：（中略）：往見緯真氏別本、分典雅、奇古、閎肆、藻豔四家、以類從殊爲鉅觀。恐失作者意、茲仍何氏經史子籍舊目云。武林何允中識。

漢魏叢書は何鐘（嘉靖二十六年（一五四七）進士²¹⁾）が百種を編纂したものの版行はされなかった。まず、程榮がそのうち三十八種（何允中序は「三十七」とするが、現存する程榮編漢魏叢書は三十八種である）を編んで刊行し、続いて何允中編本が現れた。程榮編本、何允中編本ともに萬曆二十年の屠隆の序を

冠しているが、何允中序の「緯真氏別本」の「緯真」とはこの屠隆の字であり、『明史』卷九八芸文志三子書類書類に「屠隆漢魏叢書六十卷」が見える⁽²⁵⁾。屠隆による序は、もともと自身の編本に附されたものではなかったかと推測されるが、屠隆編本は現存しないため確認はできない⁽²⁶⁾。

既見伝本各本の特徴は次のとおりである。

① 京都大学人文科学研究所東アジア研究センター蔵 唐大一冊の内〈叢一I一二一〉(叢書全五六冊中の第一九冊)

淡茶色表紙(二六・五×一六・八cm)。叢書初冊封面に「廣漢魏叢／書」、「何衙藏版／翻刻必究」。封面右上に印記「五車一板」⁽²⁷⁾。竹書紀年二卷、漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。

② 国士館大学中央図書館蔵 唐大一冊の内〈楠本文庫和八四一三二一漢(五)一〉(叢書全八四冊中の第三二冊)

練色牡丹工字繫空押艶出表紙(二六・〇×一七・一cm)。左肩「漢魏叢書三十二」、右肩「別史／穆天子傳／漢武内傳／飛燕外傳／雜事秘辛／群輔錄」と題書。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。印記「尹印／定鉉」。楠本正継

旧蔵。

③ 国立公文書館内閣文庫蔵 唐大一冊の内〈三六九一〇三三(叢書全五六冊中の第一九冊)

淡茶色表紙(二六・〇×一六・九cm)。左下「信龍」と墨書。漢武帝内傳末葉に「寶性院信龍」と墨書。竹書紀年二卷、漢武帝内傳一卷と合一冊。高野山釈迦門院旧蔵。

④ 国立国会図書館蔵 唐大一冊の内〈二一六一〇〉(叢書全六四冊中の第二一冊)

淡茶色表紙(二五・七×一六・三cm)。「穆天子傳六卷／漢武内傳一卷／飛燕外傳一卷／雜事秘辛一卷／群輔錄一卷／漢魏叢書廿一」と題書。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。印記「故榊原芬埜納本」、「文種堂／圖書記」。

⑤ 静嘉堂文庫蔵 唐大一冊の内〈函三五一架七三守〉(叢書全七六冊中の第二九冊)

淡茶色表紙(二六・〇×一七・一cm)。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。印記「歸安陸氏守先／閣書籍粟□／奏定立案歸公／不得盜賣盜買」。陸心源旧蔵。

⑥ 静嘉堂文庫蔵 唐大一冊の内〈函四八一架六三島〉(叢書全八〇冊中の第二九冊)

縹色表紙（二六・三×一七・一cm）。「穆天子傳自一至六／漢武
内傳／飛燕外傳／秘辛／群輔錄」と墨書。漢武帝内傳、飛燕外
傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。印記「雲煙家／藏書記」。
安西雲煙、島田篁邨旧藏。

⑦蓬左文庫藏 唐大一冊の内（二一・一七・三・一五）（叢書全五一
冊中の第二四冊）

淡茶色表紙（二五・六×一六・五cm）。左肩双郭刷椀題簽に「漢
魏叢書 二十二」と墨書。漢武帝内傳、飛燕外傳、群輔錄各一
巻と合一冊。叢書初冊に總目なし。

⑧宮城県図書館 唐大一冊の内（五〇〇〇四一伊達）（叢書全
五八冊中の第二〇冊）

白色表紙（二六・六×一六・七cm）。右に「漢魏叢書二十」、左
肩「穆天子傳 漢武内傳 飛燕外傳 雜事秘辛／群輔錄」と墨
書。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔錄各一卷と合一冊。
印記「伊達伯／觀瀾閣／圖書印」。伊達家旧藏。

何允中序に「程氏僅梓三十七、茲搜益其半」とあることから、
この七十六種本が何允中編漢魏叢書の原刊本と考えられる。穆
天子傳、漢武帝内傳、飛燕外傳は、この順で叢書に収められて

おり、和刻本はこの三書を合わせて覆刻したものであることは
疑いない。

次に、同版の後印本で、叢書としては改編されたものを挙げる。

B. 又

後印

欠名編漢魏叢書九十四種本所収

⑨宮内庁書陵部藏 唐大一冊の内（二一・一七・二〇）（叢書全
八〇冊中の第二八冊）

淡茶色表紙（二七・〇×一七・二cm）。左肩に「漢魏叢書 廿
八」、右肩「穆天子傳／武帝内傳／飛燕外傳／雜事秘辛」と題書。
叢書初冊の屠序は七十六種本と同版。總目は別版で經翼二十種、
別史十五種、子餘二十二種、載籍三十七種の計九十四種。何允
中序なし。印記「德藩／藏書」、印記「明治二十九年改濟／德
山／毛利家藏書」。徳山毛利家旧藏。

⑩神宮文庫藏 唐大一冊の内（叢書七八七）（叢書全一〇〇冊
中の第三六冊）

淡茶色表紙（二五・三×一六・〇cm）。左側に「漢魏叢書 竹

書 穆天子傳」と題書。叢書初冊封面、中央に大字で「漢魏叢書」、右側に朱刷で「新增補刻漢魏叢書二十種」。屠序、總目については⑨に同じ。何允中序は無い。

⑨⑩は叢書としては九十四種を収める。桂五十郎『漢籍解題』は、九十四種本を後述の増訂漢魏叢書八十六種の編者である清の王謨による増編と見ているが、筆者は未だ書冊中に王謨の名を確認していないため、ひとまず編者不明としておく。なお、この叢書で新たに増編された書目のうちの一部は、明末清初頃に刊行された叢書、五朝小説所収の本と同版である。

B' 又

後印

欠名編漢魏叢書六十六種本所収

⑪ 静嘉堂文庫蔵 唐大一冊の内〈函三二〇一架三〉(叢書全八

〇冊中の第二九冊)

淡茶色表紙(二六・〇×一六・三cm)。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。叢書初冊に屠序があるが、

前掲諸本とは別版。總目も前掲諸本いずれとも別版で經翼十七種、別史十三種、子餘十八種、載籍十八種の計六十六種。何允中序は無い。

⑫は叢書の書目数が七十六種本より少ないが、印面の状態から、後印と考えられ、七十六種本に先行するものではない。このほか、叢書零本として、以下のものがある。

⑬ 早稲田大学中央図書館蔵 唐大一冊〈柳田文庫一―D―二四四〉
淡茶色表紙(二六・〇×一六・八cm)。柳田泉旧蔵。

また、同版と思われる未見本として、滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵(叢一―E―二)などがある。

次に挙げるのはBを底本とする清代の覆刻本である。

C. 同

清〔乾隆・嘉慶〕刊(五柳居陶氏)

欠名編漢魏叢書八十種本所収

覆明〔天啓・崇禎〕刊何允中編漢魏叢書本

多紀元堅旧蔵。

左右双辺（一八、九×一三、三cm）。王漸序末題「王漸玄翰序」の「玄」字を欠画。底本にある頭注を削略。叢書初冊に封面「廣漢魏叢書」とあるが、B①の封面とは別版。屠隆序、總目も前掲諸本いずれとも別版。總目は經翼十七種、別史十五種、子餘二十一種、載籍二十七種の計八十種。B'、B"と異なり、總目に続けて、Bとは別版ながら何允中序がある。

①大阪府立中之島図書館蔵 唐大一冊の内（〇三六一―二四）（叢書全一〇〇冊中の第三二冊）

淡茶色表紙（二四、〇×二五、六cm）。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。

②慶應義塾図書館蔵（三田新館・貴重書室） 唐大一冊の内（一〇X―五六七―一〇〇〇）（叢書全一〇〇冊中の第三二冊）

淡茶色表紙（二五、一×一六、一cm）。左肩「穆天子傳／漢武帝内傳／飛燕外傳／雜事秘辛／聖賢」と題書。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。叢書初冊封面は右に同じ。印記「晚香堂／圖書記」、「奚暇齋／讀本記」。狩谷掖斎

王漸序末題「玄」字の欠画から、少なくとも穆天子傳については、清康熙年間以降の刊行である。また、底本との大きな相違点は頭注がないことである。

叢書全体としては、序跋や校者に清乾隆期の人物の名や、乾隆末期の年号が見え、このうち最も後年のものは、孫星衍「孫子畧解叙」の乾隆戊申（五十三年＝一七八八）である⁽³⁾。Bの七十六種に、三國志辯誤、孫子、抱朴子（内題は「新鈔葛稚川」）、枕中書を加えた八十種を収録する。

何允中の生年（一五九〇）からして、この覆刻および増編は、本人が直接関わったものではあり得ないが、叢書自体に新たな編者、刊行者の名は示されていない。注目すべきは、この叢書とは無関係に孫星衍が『抱朴子』に附した「新校正抱朴子内篇序」（年紀は「癸酉」で、おそらくは嘉慶十八年（一八一三））に見える、「諸子多有宋元以來及近人校正刊本。唯抱朴子僅明廬舜治本行世。五柳居陶大使曾假之於予、增刊入漢魏叢書」という記述である⁽³⁾。八十種本所収の新鈔葛稚川（抱朴子）内篇四卷、外篇四卷は、「廬舜治評校」と題し、この記述に合致する。

「五柳居」とは清代、北京の琉璃廠にあった書肆で、乾隆年間
に陶正祥によって興された。孫星衍『五松園文稿』所収の「清
故封修職郎兩浙鹽課大使陶君正祥墓碣銘」^②にも、「君見予藏孫
子魏武注、以爲世無此本、刊入漢魏叢書中」とあり、やはり孫
子も八十種本で新たに加わった書目である。これらのことから、
刊行者は五柳居陶氏と推定できる。刊行時期については、「墓
碣銘」に、「君以嘉慶二年（一七九七）八月二日卒於都門、春
秋六十有六」とあることから、乾隆・嘉慶の際と考えられる。
この版には次の修本が存在し、伝本としてはこちらのほうが
数が多い。

C. 又

後修

本文巻頭第二行は「晉 郭璞註」のみで、「呉郡汪明際訂」
を削去している。叢書初冊封面は同版。総目は同版、計八十種
であるが、別史書目の第四を「三國志辯誤 宋 亡名氏撰」
から、「鄴中記 晉 陸 翽撰」に改修し、三國志辯誤と
鄴中記を差し替えている。

① 東洋文庫蔵 唐大一冊の内（V-15-A-130）（叢書全九
六冊中の第三一冊）

淡茶色表紙（二四・九×一五・九cm）。左肩双郭刷題簽「漢魏
叢書」、題簽下部に「文會／發兌」、「第六函」、「谷邑文會堂／
自在江浙蘇／閩揀選古今／書籍發兌記」の朱印。漢武帝内傳、
飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録と合一冊。

② 国立公文書館内閣文庫蔵 唐大一冊の内（三六九-102）
（叢書全二二〇冊中の第三八冊）

淡茶色表紙（二五・一×一五・九cm）。左肩単郭刷題簽「漢魏
叢書 第 冊」に、「三十八」と冊次を墨書。漢武帝内傳、飛
燕外傳、雜事秘辛各一卷と合一冊。印記「昌平坂／學問所」。
昌平坂學問所旧蔵。

③ 国立国会図書館蔵 唐大一冊の内（二〇三-18）（叢書全一
一九冊中の第三五冊）

淡茶色表紙（二四・七×一五・五cm）。右肩に「穆天子傳／漢
武内傳」と墨書。漢武帝内傳一卷と合一冊。

④ 尊経閣文庫蔵 唐大一冊（雑部合編合刻類六）（叢書全一〇
八冊の内）

淡茶色表紙(二四・三×一五・六cm)。左肩「廣漢魏叢書 穆天子傳 一／漢武內傳／飛燕／秘辛／群」と題書。但し漢武內傳以下の題書は朱線で消してある。

⑤ 東京大学東洋文化研究所蔵 唐大一冊の内(叢書一雜叢一)(叢書全八〇冊中の第二八冊)

淡茶色表紙(二四・六×一五・八cm)。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。

⑥ 東京都立中央図書館蔵 唐大一冊の内(井上文庫四七)(叢書全八三冊中の第二四冊)

淡茶色表紙(二四・三×一五・六cm)。「穆天子傳／武帝内傳／飛燕外傳／雜事秘辛／群輔録」と題書。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。印記「井上巽軒／藏書之□」。井上巽軒旧蔵。

⑦ 東北大学図書館蔵 唐大一冊の内(狩一―二八二)(叢書全一〇〇冊中の第三二冊)

淡茶色表紙(二四・三×一五・五cm)。漢武帝内傳、飛燕外傳各一卷と合一冊。狩野亨吉旧蔵。

⑧ 新潟大学附属中央図書館蔵 唐大一冊の内(叢一―二一―一佐野文庫)(叢書全八〇冊中の第二六冊)

淡茶色表紙(二四・四×一五・六cm)。叢書初冊總目無し。漢武帝内傳、飛燕外傳、雜事秘辛、群輔録各一卷と合一冊。佐野喜平太旧蔵。

未見伝本としては、B類、C類いずれかと同版と思われる鳥取県立図書館蔵本(WA―W二八二―ホクテ―一般WH)、C類と同版と思われる愛媛県立図書館蔵本(〇八二―一三一―三一)などがある。

顧実、鄭傑文、王貽樑らの先行研究では、このB類、C類に相当するであろう版種の理解にやや問題がある。まず、顧氏は「七十六種漢魏叢書本」を挙げ、「明崇禎間武林何允中刻」としながら、汪明際の名を出さない。また、「五柳居八十種廣漢魏叢書本」を挙げるも、後述の王謨編增訂漢魏叢書所収の鄭濂校本Dと混同している。鄭傑文氏は「何允中刊《廣漢魏叢書》所載本」を挙げ、「明崇禎間武林何允中刊」とするものの、「此本雖未題署校訂者、然亦作過校訂」と述べ、やはり汪明際の名を出さない⁽³⁾。王貽樑氏は、基本的に顧氏の見解を追認するのみである。すなわち、おそらくは三氏とも汪明際の名を冠する本(を)実見していないと思われる。

四、何允中編漢魏叢書本を祖とするその他の諸版

このほかに、何允中編漢魏叢書本を直接、間接に祖とする本として比較的刊行時期の早いものに次の二種がある。これらについては伝本の数に比して、現時点では調査点数が十分でないが、ひとまず既見伝本に基づいて紹介しておく。

D. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 清鄭澹校

清乾隆五十七年（一七九二）序刊

清王謨編增訂漢魏叢書所取

覆明〔天啓・崇禎〕刊何允中編漢魏叢書本

元王漸序の末題「玄」字を欠画。次に、改張して標題なしで、「右穆天子傳六卷與周書紀年同出汲冢」と王謨による跋文がある。全行低一格。末題に「乾隆戊申臯月端午日汝上／王謨識」とあり、乾隆戊申は五十三年（一七八八）。本文卷頭は初行「穆天子傳卷一」として、第二行低五格「晉 郭璞註 南城鄭

澹校」、第三行低二格「古文」、第四行より本文。卷二以降は注者名、校者名を出さず、第二行低二格「古文」とし、第三行より本文。注小字双行。左右双辺（一八・七×一三・六cm）、有界、每半葉九行二十字。版心は白口単白魚尾。上象鼻「穆天子傳」、中縫に卷数、張付（張付は卷）とに更する、計三十張。尾題「穆天子傳卷一終」のごとく、卷六まで同様。叢書初冊封面に「乾隆辛亥重鐫／漢魏叢書／經翼二十種 別史十六種／子餘廿二種 載籍廿八種／本衙藏版」とあり。乾隆辛亥は五十六年（一七九二）。封面に「許愛日堂發兌」の朱印あり。続いて「重刻漢魏叢書叙」があり、「…金谿進士王君躬際文明博極羣書、司建昌技官之任期以鼓舞多士樂育英才復取漢魏叢書加輯爲八十六種…」、末題に「乾隆壬子孟秋上浣桂林陳蘭森撰」とある。乾隆壬子は五十七年（一七九二）。続けて、屠隆の「漢魏叢書序」、「增訂漢魏叢書凡例」、「增訂漢魏叢書參閱姓氏」、「增訂漢魏叢書目次」を附す。

①慶應義塾図書館蔵（三田旧館） 唐大一冊の内（四八一―一六〇）
（叢書全八〇冊中の第二〇冊）

淡茶色表紙（二三・二×一五・五cm）。竹書紀年卷下と合一冊。

② 国立公文書館内閣文庫蔵 唐大一冊の内(三六九—一〇六)
(叢書全八〇冊中の第一八冊)

淡茶色表紙(二五・七×一六・一cm)。本文の前に乾隆戊申の王謨跋を附すが、本文の後にも別版の王謨跋を附す。跋文後半がやや異なり、年紀はない。竹書紀年二巻と合一冊。

③ 東洋文庫蔵(Ⅴ—Ⅴ—B—二八) 唐大一冊の内(叢書全八〇冊中の第一七冊)

淡茶色表紙(二四・六×二五・九cm)。竹書紀年二巻と合一冊。

叢書の編者王謨が「凡例」で「括蒼何氏初輯叢書百種本、未板行、惟新安程氏、武林何氏二本並行於世、何本流傳較廣：(中略)：於今二百餘年、何本原書亦僅有存者：(中略)：原板久已漫漶後、又未有重刻者。所以真本難得而可貴也。謨癖愛是書、因家藏真本頗爲完善。故謀鏤板以公同好」、「何氏叢書原刻祇七十六種」としており、穆天子傳は新たに鄭濂の校訂を経ているものの、基本的にはBを底本とした覆刻と見てよい。

この増訂漢魏叢書本を底本としたさらなる覆刻本や翻刻本が、清末には続々と刊行されていることから、この本が広く流布したことが推測できる。

E. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 明汪明際校

清乾隆五十九年(一七九四)刊(大西山房)^⑤

馬俊良編龍威秘書第一集漢魏叢書採珍所収

翻漢魏叢書所収汪明際校本

元王漸序は九行二十字、二張、末題「玄」字を欠画。本文卷頭は初行「穆天子傳卷一(空五格)漢魏叢書原本」として、第二行低四格「晉 郭璞註 吳郡汪明際訂」、第三行低二格「古文」、第四行より本文。卷二以降は注者名、校者名を出さず、第二行低二格「古文」とし、第三行より本文。左右双边(二二・〇×八・八cm)、有界、每半葉九行二十字。注小字双行。圈点あり。版心は線黒口魚尾無し。中縫に「穆天子傳」、張付(張付は通し、計三十張)。尾題なし。叢書初冊に書扉が二張あり、第一張表面に「龍威秘書全/部共十集八十冊每集八冊」、裏面に「一集漢魏採珍」のごとく各集の収録内容を列挙、第二張表面に「小爾雅 神異經 枕中書/羣輔錄 穆天子傳 洞冥記/…」のごとく第一集の収録書目を列挙。裏面上部に「乾/隆/甲/寅/年/刊」、「漢

和刻本Aの刊行は、18世紀中葉の延享四年（一七四七）と比較的早い。C、D、Eの刊行時期は、それよりやや遅れて、18世紀末、乾隆末期から嘉慶初期あたりに集中していると見られる。刊行時期が最も早く、頭注を残すなど、原本Bの面目を最も保っているのは、Aの和刻本であり、そうした意味で和刻本の価値は大きい。また、このように複数の派生本を生んだBは、穆天子傳の伝世過程において、一定の役割を果たしたと言える。

五. 明末頭注本、批評本について

A、Bにのみ見える頭注は汪明際の校語と思われるが、劉辰翁、王世貞、胡王麟、鍾惺、陳深など諸家の言説を引いている。このうち、鍾惺校を冠した穆天子傳は現存している。

F. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 明鍾惺校

〔明末〕刊

明鍾惺編汲冢遺書所収

「汲冢遺書序」として鍾惺序。末題に「竟陵鍾惺伯敬又題」

とあり、印記「鍾惺ノ之印」、「伯敬ノ氏」模刻。竹書紀年一卷と合一冊。「穆天子傳舊序」として晉荀勗序があり、一張。本文巻頭は初行「穆天子傳卷之二」、第二行低四格「晉 河東郭

璞注 明 竟陵鍾 惺閱」、第三行低二格「古文」、第四行より本文。卷二以降は注者名、校者名を出さず、第二行低二格「古文」とし、第三行より本文。本文は各巻冒頭の行を除いて全て

低二格。干支ごとに改行。四周单边（一八・八×一一・二cm）、無界、每半葉九行二十四字。注小字双行。頭注行五字無郭。版

心は白口魚尾なし。中縫に張付（張付は通し、計二十四張）。尾題「一卷終」、「二卷終」、三巻以降なし。

①国立公文書館蔵 唐大一冊の内（史一九一）

黄色表紙（二四・九×一四・五cm）。左肩書題簽「汲冢遺書 全」と墨書。

②尊經閣文庫蔵 唐大一冊の内（雑部合編合刻類六）

淡茶色表紙（二四・八×一四・六cm）。左肩「竹書紀年并穆天子傳」と題書。

もつとも、鍾惺の校語と思われるこの本の頭注が、A、Bの頭注と必ずしも逐一呼応しているわけではない。

頭注本としては、次の本もある。

G. 穆天子傳六卷

晉郭璞注 明吳弘基、金堅校

〔明末〕刊

明吳弘基編史拾廣覽所収

「穆天子傳舊序」として、晉荀勗序あり。本文卷頭は初行「史拾廣覽穆天子傳古文」、第二行・第三行をまたいで低一格「晉河東郭璞注 明」、その下に第二行「吳弘基」、第三行「金堅」、再び行をまたいで「全閱」、第四行低三格「卷之一」、第五行より本文。左右双边（二・八・四×一・一・七cm）、有界、每半葉八行二十字。注小字双行。句読点、圈点あり。頭注行四字無郭。版心は白口魚尾なし。上象鼻に「史拾廣覽」、中縫に「穆天子傳」、張付。尾題は卷六末尾に「穆天子傳終」。各卷末に「箋云」として注説あり（全行低一格）。吳弘基のほか、劉辰翁、陳深、

鍾惺などの名が見える。叢書初冊に「史拾総目共五十三冊」があり、

収録する書目を「載輔」、「遺聞」「廣覽」、「衆斷」に分類する。

① 国立公文書館内閣文庫蔵 唐大一冊の内（子九二一一）（叢書全一一冊中の第八冊）

淡茶色表紙（二四・八×一四・〇cm）左肩書題簽「史拾」、右下に「八」と墨書。群輔録、雞肋各一卷と合一冊。紅葉山文庫旧蔵。

② 国立公文書館内閣文庫蔵 唐大一冊の内（三七一一一六）（叢書全八冊中の第七冊）

淡茶色表紙（二五・六×一四・一cm）。左肩「史拾廣覽 七」と題書。群輔録、雞肋、刑書釋名、占候抄各一卷と合一冊。林家旧蔵。

③ 尊経閣文庫蔵 唐大一冊の内（雑部合編合刻類四）（叢書全一〇冊の内）

白色表紙（二四・八×一三・七cm）。高士傳、孔林扈述と合一冊。

また、簡単な批評をとまなう、次のような本がある。

H. 穆天子傳不分卷

晉郭璞注 明周莊校

明〔崇禎十二年〕序刊〔金閻錢益吾〕

明周莊編漢魏叢書纂所収

①蓬左文庫 唐中一冊の内（一六九―一）（叢書全一四冊中の第七冊）

練色表紙（二四、七×二三、八cm）。左肩「漢魏叢書纂 卷十

一、十二」と題書。封面、単辺に、「別史七」、下方小字で「十

二卷八帙／漢三家 魏一家／晉四家」、界線をはさんで「穆天

子傳 漢武内傳／飛燕外傳 秘辛／群輔録 神仙傳／高士傳

英雄記 金閻錢益吾梓」。首に「漢魏叢書纂十二卷^{叙目}」として、

各書目につき解題を冠す。本文巻頭は初行「漢魏叢書纂第十二

卷」、第二行一格「穆天子傳 晉 郭璞註 明 周莊纂」、

第三行低二格「禮河觀春山」、第四行より本文。四周単辺（二二・

六×一一・八cm）、無界、每半葉九行二十四字。句読点、圈点、

本文行間に評語あり。内容によって数段に分ち、格段末に評

あり。不分巻であるこの本に収めるのは、六巻本における巻一

より巻五に相当する。叢書初冊に、「漢魏叢書纂序」として楊

廷序があり、末題に「己卯長至日社弟楊廷／樞題」。次に「敘」として、舒忠讜序があり、末題に「鍾陵社弟舒忠讜拜題」。次に「序」として、朱隗序があり、末題「己卯七夕後二日長洲社弟朱隗拜書」。次に周莊による「漢魏叢書纂選義」があり、末題に「孟秋周莊記例」。次に「自敘」として周莊序があり、末題に「立秋後六日禾水周莊玉荷題」。陽序、朱序の年紀「己卯」は崇禎十二年（一六三九）か。

Hは、「漢魏叢書纂選義」において周莊が「叢書輯自括蒼何氏鐘、目有百種、迨後止存三十餘種、武林本廣之乃得七十六種：（中略）：所纂書七十六種悉據原目」としており、やはり何允中編漢魏叢書に拠った本のようなのである。

本稿では既見伝本に基づいて簡単に紹介するにとどめるが、F、G、Hについてはいずれも先行研究に言及がない。日本国内の所蔵点数も少ないが、あるいは中国においても希少となっているのかもしれない。

六、おわりに

中国における『穆天子伝』伝本研究の不備を挙げるならば、

まず第一に何允中編漢魏叢書所収の汪明際校本 B にはじまる系統の書誌の把握が不十分なことである。無論、これは叢書全体の書誌に関わる問題でもあり、本稿で論じ尽くしたとは到底言えない。しかし、今回、「何允中編漢魏叢書本」などと一括されがちな本のなかに、原刊本 B、改編後印本 B' および B''、覆刻本 C、その修本 C' と、複数の種類が存在することを確認できた。また、この系統から、清代の流布本となる増訂漢魏叢書本 D や、龍威秘書本 E が派生していくが、それらに先んじて、日本で B を底本とする覆刻本 A が、いち早く出版されていったという事実も見逃せない。

第二に先行研究から漏れた F、G、H のような本の存在である。本稿で紹介したものは、必ずしも善本とは言い難いものであるが、多種多様な版本が現れる明末以降の『穆天子伝』の出版状況を全体として把握するうえでは、看過すべきではない。

最後に、こうした遺漏のあることは、これらの諸本が中国で

は、ごく希少なものとなってしまっている可能性も考えられる。そうした意味で、日本における『穆天子伝』伝本研究の意義は少なからずあると言えるだろう。

注

(1) 例えば、『晋書』卷三武帝紀は咸甯五年(二七九)「汲郡人不準掘魏襄王冢、得竹簡小篆古書十餘萬言、藏于祕府」、卷三六衛恒伝は太康元年(二八〇)「汲縣人盜發魏襄王冢、得策書十餘萬言」、卷五一東皙伝は太康二年(二八二)「汲郡人不準盜發魏襄王墓、或言安釐王冢、得竹書數十車」などとす。なお、本稿では、『晋書』(北京、中華書局、一九七四年)を用い、以下も同様である。

(2) 藤田勝久『史記戦国史料の研究』(東京、東京大学出版会、一九九七年)第一章「『史記』と中国出土書籀」は、汲冢が戦国魏の国都である安邑(現山西省運城市)や大梁(現河南省開封市)から離れた趙との国境付近にあることから、王墓である可能性は低く、封君の墓ではなかったかと推測している。

(3) 『穆天子伝』には、現在まで伝わる旧序として、晋荀勗

序と元王漸序の二つがあり、現存する最古の版本である明正統道藏本は二序をとにも附す。以降、版種ごとに取捨がある。

- (4) 小沢賢二『中国天文学史研究』（東京、汲古書院、二〇一〇年）第十章「汲冢竹書再考並びに簡牘檢署再考——『穆天子傳』「長二尺四寸」の背景——」は、出土竹簡の簡長について詳しく論じている。戦国時代の出土竹簡のなかには三尺のものもあるが、二尺四寸も長い部類に入り、また、出土例が比較的多い簡長である。

- (5) 『春秋左伝正義（十三経注疏）』（北京、北京大学出版社、二〇〇〇年）を用いた。

- (6) 洪頤煊校本としては、平津館叢書本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 清洪頤煊校 清嘉慶十一年（一八〇六）刊 平津館叢書所収）などがある。

- (7) 『隋書』（北京、中華書局、一九七三年）、『旧唐書』（北京、中華書局、一九七五年）、『新唐書』（北京、中華書局、一九七五年）、『宋史』（北京、中華書局、一九七七年）を用いた。

- (8) 現存する最早期の版本は、道藏本（穆天子傳六卷 晉郭

璞注 明正統十年（一四四五）刊 道藏所収）であり、日本国内では宮内庁書陵部に所蔵がある。続く天一閣本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 明范欽校 明（嘉靖）刊 范氏奇書所収）は、上海涵芬樓による景印本が四部叢刊に収められる。萬曆以降の明代の版本としては、臨淮李言恭青蓮閣本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 明李言恭校 明萬曆十年（一五八二）刊、国内では名古屋大学文学研究科中国哲学研究室所蔵）、彙刻三代遺書本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 明范欽、趙標校 明萬曆二十二年（一五九四）序刊 彙刻三代遺書所収、原本は未見、国立国会図書館にマイクロフィルムがある）、快閣藏書本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 明唐琳校 明天啓六年（一六二六）刊 快閣藏書十種所収、未見）、叢古介書本（穆天子傳不分卷 晉郭璞注 明天啓七年（一六二七）序刊 明黃禹金、邵蘭生編叢古介書所収、靜嘉堂文庫所蔵）などがあり、また、本稿で詳論する明何允中編漢魏叢書本よりやや先行するものとして、程榮編漢魏叢書本（穆天子傳六卷 晉郭璞注 明程榮校、明程榮編漢魏叢書所収、所蔵多数）がある。

- (9) 『景印文淵閣四庫全書（第一〇四二冊）』（台北、台湾商

務印書館、一九八五年)を用いた。

- (10) 顧実『穆天子傳西征講疏』(上海、商務印書館、一九三四年)「穆天子傳知見書目提要」。

- (11) 王貽樸『穆天子傳匯校集釋』(上海、華東師範大學出版社、一九九四年)「穆天子傳版本及注疏、研究文著」。

- (12) 鄭傑文『《穆天子傳》知見版本述要』(北京、中国国家図書館主辦『文獻』一九九四年第二期)。

- (13) 博文堂丸屋田中市兵衛、玉樹堂唐本屋吉左衛門により出版された延享三年(一七四六)刊の韓非子二十巻にも芥川丹邱が跋を書いている。

- (14) 博文堂藏版目録に關して、無窮会藏(神習文庫一一六九七)は、穆天子傳を欠き、漢武帝内傳と飛燕外傳との合一冊本であるが、藏版目録のうち、①②③で一部の書目に附されていた「未刻」という文字の削去、書目の変更、墨格部分への書目の追加など、複数箇所にとさらなる改修が見られる。なお、この本の漢武帝内傳は未修で、太神序も無い。

- (15) 国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』(東京、汲古書院、一九九〇年)によると、太神貫道は大阪の国学者。
- (16) 慶應義塾図書館藏(三田旧館)〈六六一六五―一〉、国立

公文書館藏(三〇九一七四)、新潟県立図書館藏(史ⅠⅣ

Ⅰ二〇〇四二(二))など、穆天子傳をともなわず、漢武帝内傳と飛燕外傳との合一冊として架蔵されている本には、

漢武帝内傳の太神序、および巻首の改修が見えるが、④以外では明和三年の刊記や山本文會堂の刊記を附すものは未

見で、目録やデータベース類でも確認できない。また、新潟県立図書館藏(史ⅠⅣⅠ二〇〇四二(二))は同館藏(史

ⅠⅣⅠ二〇〇四二(一))の穆天子傳と連番で架蔵されているものの、表紙、大きさなどが全く異なるため、本来は別個の伝本と思われる。したがって、漢武帝内傳修本と穆天子傳が組になった伝本自体、④以外には確認していない。

- (17) 井上隆明『近世書林板元総覧』(東京、青裳堂書店、一九九八年改訂増補版)を参照すると、文會堂山本淺治郎の活動時期は文政・天保近辺である。

- (18) 『中国地方志集成上海府県志輯』(上海、上海書店、一九九一年)所収。

- (19) 清徐沁撰『明画録』巻五には、「汪明際、字無際。餘姚人、占籍華亭、登鄉薦。畫山水、蒼涼歷落、筆致秀逸…」などとある。なお、『明画録及其他二種』(叢書集成初編一六五

八」(上海、商務印書館、一九三六年)を用いた。

(20) 『光緒嘉定県志』(前掲中国地方志集成所収) 卷一九文学

にも汪明際の伝があり、「著述頗富、嘗校正廣輿記、董子繁露、淮南子、竝佚」とし、少なからぬ著述があつたことがわかる。現存するものとして、穆天子伝のほか、性理會通(崇禎七年序刊本、蓬左文庫蔵、未見)、鵬冠子(天啓四年序刊本、蓬左文庫蔵)、後述の明何允中編漢魏叢書所収の華陽國志の蜀志、南中志などに、校者としてその名を冠している。

(21) 『明季北略』(北京、中華書局、一九八四年)。

(22) 多洛肯『明代浙江進士研究』(上海、上海古籍出版社、

二〇〇四年) 三八七頁。

(23) 潘榮勝主編『明清進士録』(北京、中華書局、二〇〇六年)

六八一頁にも、同様の記述が見える。

(24) 潘榮勝前掲書四三九頁。

(25) 『明史』(北京、中華書局、一九七四年)。

(26) 桂五十郎『漢籍解題』(東京、明治書院、一九〇五年)

も同様に言う(八三〇頁)。

(27) 穆天子傳を欠くものの、無窮會藏(平沼文庫三九二〇)

に同じ封面がある。封面右上の印記「五車一板」も同じである。

(28) 桂五十郎前掲書同頁。桂氏は、王謨はまず八十六種を編み、九十四種へ拡充したと見ているようであるが、少なくとも穆天子傳に関しては、九十四種本の既見伝本は何允中編本の版を用いている。仮に王謨による編だとしても、まづ旧版を用いて九十四種本を編み、その後、新たに版を起こして八十六種本を出したのではないかとも思われるが、いずれにせよこれは叢書全体にかかわる問題であり、本稿の射程を超えるため、他日を期したい。

(29) 筆者の確認した限りではあるが、少なくとも東林蓮社十高賢傳、還冤記、尤射は五朝小説本と同版であつた。なお、五朝小説は陶珽編說郛(いわゆる重較說郛)の明末清初ごろの刊本と版を共有することが知られている。この問題を含めた明末以降の叢書間での版の流用については、倉田淳之介「『說郛』版本諸説と私見」(京都、京都大学人文科学研究所編『東方学報』第二十五冊(創立二十五周年記念論文集 東方学報第二十五冊・人文学報第五冊合併) 一九五四年十一月)に詳しい。

(30) この叢書については、大沼晴暉「秘蔵(八五) 廣漢魏

叢書 明何允中編(清) 狩谷校斎校合書入本 唐大百

冊 第二十九・三十冊配抱經堂叢書本」(東京、慶應義塾

大学編『三田評論』九六七、一九九五年三月号) に詳しい。

(31) 王明『抱朴子内編校釈』(北京、中華書局、一九八五年

所収のものに拠った。

(32) 『五松園文稿(叢書集成初編二五二九)』(上海、商務印

書館、一九三六年)。

(33) 鄭傑文氏はまた、「何允中刊《廣漢魏叢書》所載本」の

一種として「清嘉慶中翻刻本」を挙げているが、やはり汪

明際の名を出しておらず、これは汪明際の名が削去された

C'を指すものと思われる。

(34) これらについても調査が十分でないが、例えば、光緒二

年(一八七六) 刊(紅杏山房) 八十六種本、光緒六年(一

八八〇) 刊(練江三餘堂) 九十種本、光緒二十一年(一八

九五) 刊(黃元壽) 九十六種本、宣統三年(一九一三) 序

刊(上海大通書局) 九十六種本などがある。

(35) 龍威秘書には、この乾隆刊本を底本とする世徳堂による

覆刻本が存在する。

(36) 乾隆・嘉慶の際と推定した、Cを含む漢魏叢書八十種

本の刊行時期が、龍威秘書の刊年(乾隆五十九年)より早

いのか遅いのが、この問題には大きく関わる。

「漢魏叢書採珍」と題する龍威秘書第一集は、収録書目に

「枕中書」を含んでいるが、枕中書はBを含む漢魏叢書七

十六種本にはなく、Cを含む八十種本で新たに加わった

書目であり、これだけを見ると、八十種本が、龍威秘書に

先行するようにも思える。しかし、枕中書はBを含む九十

四種本や、Dを含む八十六種本にも含まれるため、八十

種本が龍威秘書より先行する決定的な証拠とはならない。

試みに、鄭傑文氏の作業を参考にして、B、C、Eの間

の文字の異同を見ると、現時点で確認できたものだけ

で、以下のような例がある。

ア、卷一第一張左半葉第八行郭璞注

B 鄴國名

C 崩國名(崩は誤字と思われる)

E 崩國名

イ、卷一第四張右半葉第九行郭璞注

B 馬標赤者

- C 馬標赤者（標は誤字と思われる）
 E 馬標赤者
- ウ、卷五第二張右半葉第五行郭璞注
 B 音櫟
 C 音才（才は誤字と思われる）
 E 音才
- エ、卷五第二張左半葉第九行本文
 B 王巨（巨は臣の異体）
 C 王臣
 E 王目（目は巨の誤字と思われる）
- オ、卷五第五張右半葉第五行本文
 B 不如遷上
 C 不如遷土
 E 不如遷上
- ア、イ、ウのように、CとEで誤字が共通するため、一方が他方を参照した可能性は高い。また、エのようにEがBの字に拠ったうえで誤ったと思われる例や、オのようにCだけが異なる例があるため、Eが先行する可能性も否定できず、その場合、CはBを底本としつつEを参

照して版行されたことになろう。逆にCが先行したとすれば、EはBとCをもとに参照し、取捨したことになる。なお、AとD、および明代の諸版の多くは、ア、イ、ウ、エはBと同じで、オは「不如遷土」に作っている。

この問題は、漢魏叢書各種や龍威秘書という叢書全体の書誌に関わるものであり、なおかつ広く諸版を通見し、より緻密な比較対照を行う必要があるため、性急な判断は差し控え、今後の課題としたい。